



牛馬問

四

止



牛馬問卷之四

目録

- 叙と失ふ後 一
- 爲賊の墨 二
- 虚櫛 三
- 人相 四
- 猿の細柳 五
- 定紙の句 六
- 幼才老学 七
- 一の字例 八
- 雁水跡の分英 九
- 龍分 九
- 又筆和尚 九
- 博奕 十
- 九字十字 十
- 下馬札 十一
- 嘉祥の祝 十二
- 桑葉待 十二
- 氏の新 十三
- カレダ帚 十四

○本邦金銀錢ゆへにわがの古記 十五

牛馬問目錄

牛馬問卷之四 前集

新井白蛾著

○先子予を知るは多の比に貴しきも乃て風ふ起
 て庭園小遊ぶを妻を以て年三の勢通せざるをりて
 唯々急意し妻を以て庭園の財に銀の叙を失ふ
 そのぬれもゆきと女なりとの疑を以てしるもそ
 從ふ所止む所なく生乃季も来ぬれんかの
 母と母とをせし事定めては子も善ぬれん世と
 こそ全煤とていせし庭の志乃屋の妻も墓に埋
 てまゝおしし迷ふを財に飛てこそふへし事と是を
 飛る人な疑ひ他人とゆふと小庭もき事しるは

牛馬問四

輟耕種一本八利といふの毒ととも小版尾を毒
令穢めて肉を刺して口に入るとは此の時上客ありて
支出て客に社に毒も肉を啖うと及至て起
茶とすも心あるは乃る乃て穢し何れ令穢
失ふ者なり愛形の時なりりの由婢例して
穢仕にを竊れりなせしむる終不穢なりし
死すまで命を損ふと感去て厚屋を掃く之
上の垢を掃しむ忽一物を穢落し居るありて
声ありて是れ乃る乃る失ふ愛の令穢朽骨と
なりし墜る所を所とす乃る乃る猫来て肉を偷む
時令穢肉を刺しぬるともいふし志し世婢見

あり不及して飛上死に哀む此の事
果といふも和漢同目の疾のことなり死して後人乃墜
と云

○一客ありて夜活と一人自我船而海をさるる舟
郎の白帯見事しえ此者見知志あり船とさむ
手指を而穢見れり大なる蛇を陰に水中と親し
水中より大なる鳥賊を向て蛇を乃人の海に
るある間をくならりれり鳥賊は穢及至と嚙て彼
蛇小なりたかくれり蛇と断る小なり海中小落る
の奇と感せり乃る乃る又他は穢して夜活とあり
乃日遊を以て人鳥賊を料理するに彼れとら鹿

丁の業ノサは殊カタなれど鳥賊オウソクとあらふの方と云くは後
 中の業ノサやぶと云ふを流ハルと云くを悪く治ホトトドハラス
 不フおのりカシ彼コ見ミ腹ハ工コそれ方と云は後ナキナラフ解トク大
フドモキ不フ解トクあらは彼コ鳥賊オウソクと解トクてをコ家カ馬バと云ふも不フ解トク
ナデサスリと云は後ナキ極トク度トクのナキ方ナキ所ナキと云は後ナキ見ミと云
コ工コならは痛イタ心シ而シも足タらシ工コ痛イタ極トク度トク付ツの間マ
イエ念イて流ハルと云は遊ユふコのナキ皆トク人トク不フ解トク
イカ鳥賊オウソクのスミ墨スミ腹ハ乃ノ毒ドク流ハル解トクすコ世セ女メ人ニの流ハル解トク
ニ鳥賊オウソク乃ノ墨スミ流ハル蛇ヘビの毒ドクを解トクすコ事コト報ホウひコトなシと云
ク能クと不フ解トク始ハジく書シて存ゾク人トクの体タ也ナ

○菅氏ケウシの白盧橘ハクルクとは何物也 予コノ白杜物ハクヂ種タネ類
 多オホシ一同名イドウナ矣ナリ種タネなりシのオホシ先マ先マ先マの令コト種タネと
 以モてシ世セ俗ソク令コト種タネとシは是コトなり 菅氏ケウシ曰ク
 枇杷ヒハのオホシ也ナリ 予コノ白文ハクブン選センの注チウ誤コトて枇杷ヒハとすコト
キヤク事コト細目コト秋アキ名ナをシ種タネとシ辨ハとシ付ツてシ足タ下ゲ 他タ亦オ秘ヒ傳デン
ク花ハ鏡キヤク小枇杷コヒハ一名イチナ魚橘イサキとシのオホシ庄シヤウ選セン注チウを誤コト流ハルなり
 菅氏ケウシ曰ク白ハク橘キと云ふコト載タイ叔シヤク備ヒ湘シヤウ南ナン此コノ待タ魚橘イサキ葉エフ開
ヒ楓葉ヒ葉エフのオホシ白ハク解トクと云ふ 予コノ白杜ハクヂ物モノ魚橘イサキ楓葉ヒ
 一時イツジ之コト流ハル以モて流ハル流ハル約コトと云は後ナキ解トク不フ解トクのオホシ流ハル
 と解トクの要コト也ナリ又マタ之コトと云ふと云は後ナキ自コノ意コトを流ハルと云ふと云は後ナキ
 倫湘リンシヤウ南ナン小コ云クて東方トウホウの京キヤウと云ふ人ヒト事コト地チ也ナリと云は後ナキ

どかす時去水流きて住まらざるを記と歎せし
らていふ我は南水來て世水なる遊ひは魚
橋の記の用く比なり一ふ今來て見れは早楓葉
此義の時意し世は月日たるる我は都の
さる事やと解何の理處と考す世世菅氏
世さるはるはな大雅堂ふかこれ大雅堂曰能周
法解うたまたは義とともにな出ての意思と
て同也せし我を信又大我和尚は解と見て死め
は解う難波の書は及るれやの意思とて又
同也せし二意の意同激ふ出たかこの腐況を
考して後笑の二つと

○我人の白人相の況を原不存大抵我はの法も
持興とありし形と相するは心は論とるふと
たし荀子非相篇と作て是うなるふ意ありのを
引目むるをも世に術さうんあて文盲漢陋なる
輩かみ我揚て人の貴族禍福とていふを説とる
ふ一かと以て衣被乃精起ふらて禍福をらまら
んとするあ一富ふ人た貴一疎なり人は考ふ凶也
人よ是る記の記 予白を術と拙して
售て錢とりしむらるの何れお老のこたらんや
を庸下なり銭見て一切ふ是を被と一枝の括ふ
と見てを榦な伐ふ異あるを術の妙なり

人ノ意度蓋スル一ノ奇力ノ一ノ奇力
開ク一ノ又一切ノ相法を破ルも心公誠意あり陰
徳を以テ是れおせし一者今も奇力ありの
手親しく是れ見せし一宗元の間一鬼眼と
いふのを一人彼ノ方鬼眼を指して曰公は大小
福力人たり志願も憐れ申林の前後に自付
命数定まり容懼れし時附一八月乃初し楊
子といふ舟とて此の漢と見れぬ人
夫小仰て大よきけり客船を問ひ婦人曰我妻小
モトデ女とて賣賣一故しゆれぬ我をかく我に
測り利分を以て日用と見せぬかくのこし今家

そは錢と失ふ方のいふ事亦死のこゝろありて
小面錢合とてまじりてなりけりけりけり
めんといふ客船一七日合錢のりて人の命は夢よ
なりぬれを失ふ事の一信とわきて家小改
鬼眼のいふ事と父母小若親戚は旧お集りけり
ひりけりおちり一扱命法一親の目を結ぶつぐ
る一終るも子錢起れども不死ありまじりて
彼楊子といふ客船一客とて去る錢を以て下
人小覚錢抱て来り途中小遇ぬ人礼法して曰
去身君の汚恩のいふ事一より聞けりけり見張
者一親子のいふ事お命半再生の汚恩のい

まゝと感歎して謝りていれお慰めよと申され
慰め給て曰云は中林は何れ死むる程も不
を見て笑て曰是陰徳の致すと云し物は一老陰
女陽の命を救ふたらん容甚憐と奇と云は
多く古書ふる田舎人我と歎て何れ次轉る
人よ事か夜信と云まのこ

○柳生但る古殿様を武王洞の山寺に打ち方小
し七級樹をまひりしは様も其極業に通て
物心の子家といひも世様不願しと云し夜武
治人様を自慢して何れは極生云(此合記と云
縁と申す事り對面の後叔松等少く様と云る

名様之宛に下といふ但別々のみ安き事なりと云
世様と云合えしれりとも附件の浪人大よ後お
き被るふて是はおまわたり事と申おなれ
先之合えしれりとも是は形好く竹刀と稱か
く此様も竹具は面鏡うけ小志をな指てま
ふ之合彼りの只一突は突例と云り火様つ
くくと曲て何れ造作も好く件の男と云しお業に
お遠し今一紙と申けさる又一玉乃様と云る
之合又は様も申され大よ面目と云し油も
伊予十日程と云て目もつと様も云まは
又柳生のりて對面の上叔件の様と云合

をくねる但別家ありてふ方工吏先下りも
法外上達し今彼は様ども中へ縁事成りしにま
さも立合入る道此とて様とあふふまにお向ひ
いまは難を出さる様大不啼てかへりて此方件此
男も但別の中より真義を傳へりていふこれ
様へ之を言ふ言状志のいん人中のるを言状知覚人
とてか妙妙と使ひまへりて

○念珠石山よりて堂とて

うとて言ふ大陣埋るるりて

童子かへりてふ言曰死堂なりと高紙書き

池水より大なるいんをばはる家か

は童子何りのれや又伴夏の日代ハ牧乃初官並
陸れお討れて度故一敷とて返居依依書に
文通とよとてそ文お法苑經開八卷心成仏身と
る言状ふて獲りてりよ陸院のうちにお我
の小見乃そ文通もじへりて言状乃陸へりて
法のこれけりひりてこれハ投す
かりてけり乃と持ちりて思ふ

又ひり南殿の遊中お我れまふとちよまれ生
るも是に候好乃まおねて不長のもなりとて云
は地のか派おるりて物説なりてふは武部と
やん六波の附我りていふ書渡りて

く育る有るもく育るも有る事

さるも有るも有る事

かゝるも有るも有る事

多の物も有るも有る事

多の物も有るも有る事

遅速の物も有るも有る事

遅速の物も有るも有る事

遅速の物も有るも有る事

遅速の物も有るも有る事

遅速の物も有るも有る事

事い事と付... 抵意之不遠... 仁在處又... 拍子利... 練... 今不情... 宋の杜... 十八所史記...

次の如くみて直極美の筆法なりと云し又王
羲之にも法廻が舞岳乃碑と見て今また天子
月試費一とわると始て正法と學ひ初と云は
時政亦又十二の如くそそ自學ひ初とむる

○契人來り活と天老和當の二乃事此向ふ及子因
て慢書して見童と換く

ハシメヨリ一 六 學 モツタ 一 一 ソシメ 一 ヒトリ 道 一 一 ヒトリ 重 トキ 一 スベシ
心 一 スベシ 一 思 ヒニ 知 一 カキ 一 智 一 カキ 一 志 一 カキ 私
一 ヒトシ 言 ニ 約 一 ニ 天 命 一 カキ 一 カキ 一 後 一 カキ 一 勿 失

○信別確水峠にて作者不記

八万三千八百 一八二 一五十二 四六
二百億四百万

○斐人の曰ふる事右のよとてか例を云 曰
平和なれ及に律くらねんを云を云は長て人
小四一し人の知る事二三四の事

悪ひは人になつて玉素れ 俊成
よまぬぬまの二三回 家隆
高門やこれ書きまくりの進路

あつられて又四二二二日
それら一れみ一れ即て感志するなり
約乃何しあき二三日 定家

○却人の曰白承天日本一海のり方従ふ也 曰不
替乃無能なり其小樂天来りておとも位在明
神のおもふやれ一と日本ふ人ともげは物子
れや日本の奥とよんて却て恥を法にそく
父母が石風雅のの伝をるん又弘法大師
は左太のふた存乃是にふて書ゆふ加五筆如高
とのふ是又三笑の馬一書法小五の執筆の
名乃一曰單句二曰撥動三曰撥管四曰撥管五

曰撥管杖五の法を自他自立ふ均あり加五筆
和尚の名乃大師自作の執筆法傳とあり書る
を撥がたり我知事乃乃最中下及大師の
曲筆法せん皆叢俗の云意なり

○いふ一所謂結契と今早俗のいふのふ能
今中綴のなをふ乃のら蓋發一々蓋いや一
わらん人乃可愧不怒の事しお筆紙を人れ曰情
契一ふ二物三と四性五力六偏七盜八害と九
一心と十心紙押柄ふ持なり二物と三金銀を山に
持て一両負ハ紙ありと又又又又十両と紙事し三
よと上よふかると四性と五心入在法と云

性と又交する事又力と力隔りまけり付た世
理をいひて力立ふて辨るる六海とは海といひ
まけり向を發せし競ひ死ふ事七海といふ人の
目録く海一むく事八海といふの七多を以てま
ましくも負く事付とおよと切殺して死むおの
仕方なりと書りありあり人仕害せしれ包と
害と害を記するあり非道の欲と貪りの
甚くまうれ

○或人の曰世亦秘言の九字十字といふのは
本佛教なりありや道家なりありや 曰儒教道
の法ありはなりは世兵術なりありて今多

僧徒山伏等々の專用となり軍林室裡軍務論本
た云印周公且小教一とわれも大方の意延
を記すは今の真字乃平畫を見て況と作りて
篆書の義は一白小ありありの偽作なり
闕乃字は門裏裁豆長一寸と云は是今通俗
の偽文と見て作り闕と門小ありは門小の字
なり似たり字は世多く門門と誤り候し中れ断
と界書して封と書来り闘と闘と偽書は是
周公の封何れは字附わんそ文盲等と云ふは
その他皆かくのよと今世亦傳ふ九字は各家の法と
雜合はると云ふ 或人の曰九字の文字は十字と

いりのめや 曰陸兵衛者皆陣列在前に
九字形は是も勝の二字を加へて十字形なり

○或人の曰具足櫃小前の字試書く事又下馬
札の事あり 曰下馬札はけいふく次二字札と云

應した二品も中納言の家格秘傳の事あり
秘傳の事ありしりは不傳にて是守護神なりと

心付し一平不傳なりとも傳くも持明院中納言
基村卿より御家傳九箇條の大秘事免許事なり

家管原先生統傳と文継又武家方の傳は實我
又左衛門尚祐先生より傳來と傳てしるをい

秘密と聞てそとひそ書な見たりとも十條乃

は授と聞てんは皆徒事の事先師の書並個先生
を代徳の二字札と見たりも多し素人の書し

かたれぬ
○或人の曰六月十六日と嘉定も書又嘉祥も書

いふ事や二字なり 曰林道春先生の記は後撰
藏帝いままも即位よりさね六月十日自小室の

嘉定蹟十六文より食物と個(御経小供)より
例と蹟跡のほも用ひぬして日陰をて蹟なりと

見たり又或人の記は仁明天皇の御宇兼和子
中六月を後撰より白紙と記と龜と目か度りの

とて百官賀して六月十六日嘉祥と改元なり故

心算の文字と書し又元禄年中將軍家の
六月十六日徳侯明彦の記に大史の筆を嘉祥と
見下れん嘉定の字をよるやかたはとまはし
況各加るわけも苗村大史の書方取と用い
○或人の曰南都大寺小紫雲待を信小紫雲待
の文字此中と冠と奉とて東大寺といやわら
蘭の内と東の字を東ふあはれは難ひ異物も
あやや 曰晋の王儻が三刀の養乃と記三刀別
乃字と記是たがり誤し信小加と州の同字と
碍事し加は音離割と別を是令く別字し
極の事と附の具ふはれは作よりよりあは

代の法則はなかりなれは誰やんのか状記ふ
と梨と用ひ梨はあ乃本と書しゆのなは
も西と西と似て方字加栗の字も西とを
何のさもはれは作ふいりきりりりなり
け難ひ毛筆ふいりあはれは次叔葉雲結の本
は英熟香といひりりり又天子とて白菊
株とてあふ
そくおわと誰よりいりりりりりりりり
林下りのちれ白きりりりりりりりり
又細川家は初書といひりりりりりりりり
きりりりりりりりりりりりりりりりり

い月も初巻れら地よりすれ
伊豆歌ふては樂舟といふ

世の中此う紀を為すはむ樂舟の乃
そりぬらきし里所もあられつ

右三短ともは蘭委待好也

○或人の曰本朝の系代信詩文を作為し遠小
唐人の姓名亦似人事をとりし氏姓一字よりして通
因に流るるとして皆をたけし事あり 曰是下此言

去りし願ふ事人々姓を稱せし姓字なりとの多

又微生端本新垣長桑子桑叔梁樂正巫馬司

馬歐陽函藩のこと記複姓も又多し又侯力侯

侯伏斤可地延可朱暉の類ひ之字姓もあれどもと

目付の系代乃と杜撰は畧者すり事と不實

馬と字姓司る巫子は複姓なりは一字と首て

馬といふ何の別取らん樂は單姓樂正は複姓

一字減者て樂といふ是又何の別取を以てせん

是上の一字減者て應うて下乃一字を去るは

本朝此系代を以て願ふ望月と云氏月何系と

書ては唐めめとして望何系と書又上柳といふ

上何系と書ては唐乃といふとて柳何系と云

類ひぬらきし里所もあられは是上の文字を以て

此用ひて定むるはそとひ姓名の事人々似るは

とも月作りの礎態なりぬ絶とスル人も
 まぬ絶の先祖の相根元し氏の子孫出を
 別なり此の枝乃とくお新姓を形く氏のもの
 新より多しを文字新のりん先祖を新と事
 屋々々陰の新田新山新村新川新園新庄
 新舟の氏乃と記各由てお新なるしゆを
 て一字新推と新何事といふ他氏族の出
 別人殆復新よりなりぬ
 ○江戸めくは蓮を収て扱く根本の新乃新
 似る日帯を是と事と聞よカシダバウキと事
 江戸小神田とのしおあ収皆人神田ら作也

のと新より編り帯の新なり

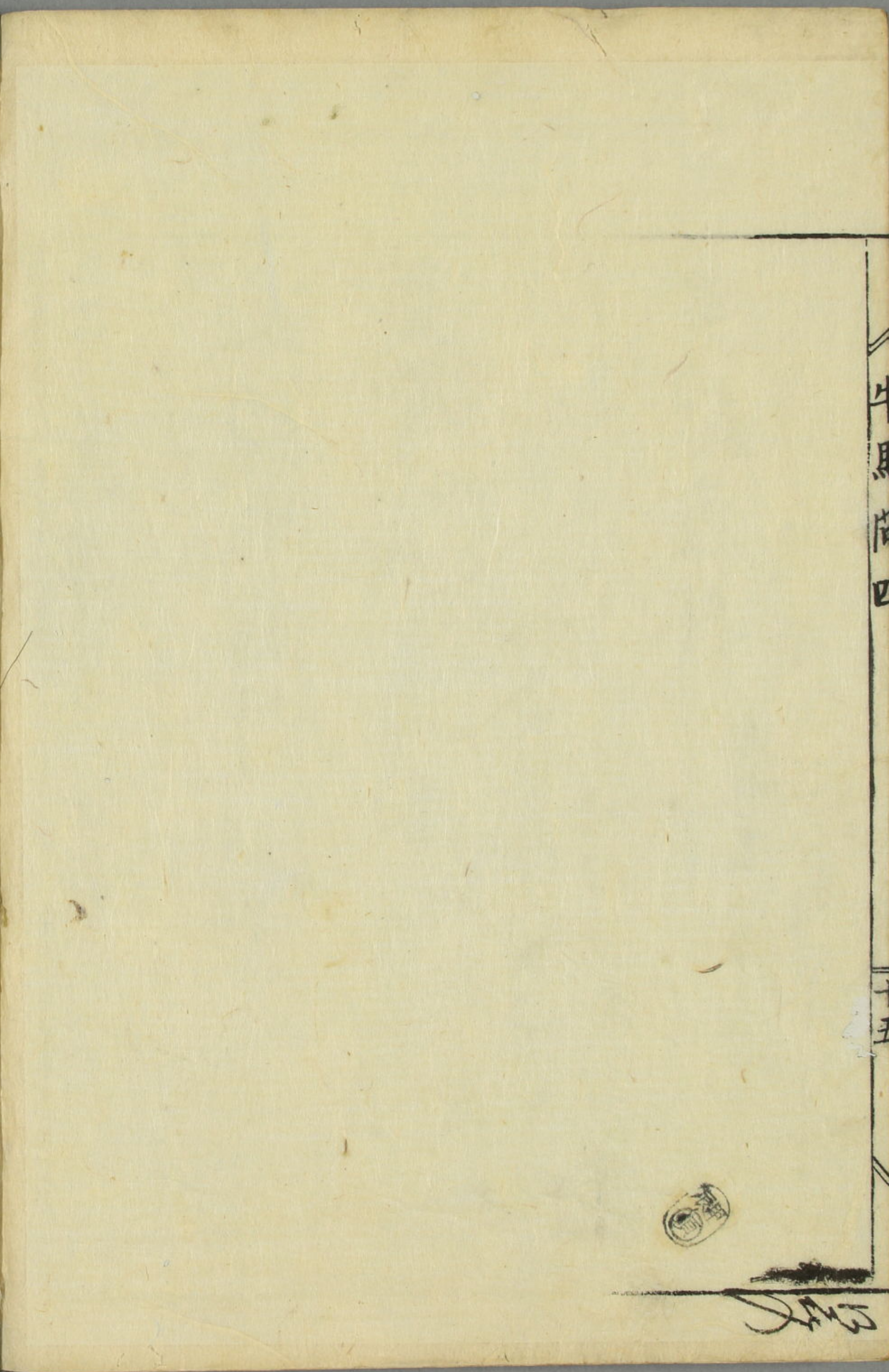
後編牛馬問 嗣出

寶曆六 丙子 孟春

大坂高麗橋一丁目
 吹田屋多四郎梓

皇都書林
 寺町通三條上ル丁

菱屋 新兵衛行



牛馬商四

十五



Handwritten signature or mark.

